

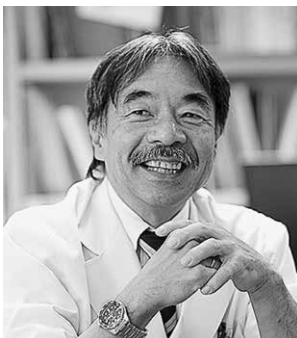


日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター

No.15 2016年3月31日発行

■ 理事長ご挨拶

松本 秀男



昨年11月の理事会で理事長を拝命致しました。高岸憲二先生の後任なので、ちょっと荷が重いのですが、「スポーツ医学」には私なりの思い入れもありますので、しっかりと責務を果たしたいと思います。

さて、高岸先生が理事長になられた4年前は日本整形外科スポーツ医学会（JOSSM）にとって、大変な時期だったと思います。いろいろな意味で過渡期でした。学会の法人化に伴う様々な体制の変革、専門医制度改革に対する対応等、スポーツ医学会そのものの意義が問われる部分が多々ありました。更に日本整形外科学会（JOA）との関係、日本臨床スポーツ医学会やJOSKASなどの関連学会との相互関係等を含め、JOSSMとしての立ち位置が難しい状態でした。学会の会員数も、それまで伸び悩んでおり、どの様に学会を活性化すべきかについて、いろいろと議論がなされていました。これらの諸問題に対して高岸先生を中心とした前執行部が様々な面から対応され、現在では会員数も順調に増加し、2000名を超えるほどになりました。

さて、ここまでにして頂いたJOSSMを引き継ぎました。JOSSMを更に発展すべく、現状を考えて、今後の行動目標を次の3つに決めました。

1：関連学会との関係強化

スポーツ医学関連の学会として、日本臨床スポーツ医学会、JOSKAS、日本体力医学会、等があります。これまで、それぞれの学会がどの様な役割を演じるべきかについて、はっきりしていませんでした。また、それぞれの学会同士の協力関係も微妙でした。そこで、まず、JOSSMとしての役割をはっきりさせる必要があります。

JOSSMは、やはりスポーツ医学と整形外科の両方の要素を兼ね備えた学会であるべきだと思います。この点で、すべての診療科を横断的に包括する日本臨床スポーツ医学会とは異なると考えます。もちろん周辺領域は存在しますが、あくまでも中心となるのは運動器の外傷や疾患の予防と治療でしょう。競技スポーツもあるでしょうし、健康スポーツもあると思います。もちろんスポーツの継続や復帰、更にはパフォーマンスを常に念頭に置いておくことは必要です。そしてこの立ち位置をはっきりさせた上で、他の関連学会との協力関係を築いていくことが大切でしょう。幸いにも日本臨床スポーツ医学会やJOSKASのメンバーとは、心を開いて相談できるので、それぞれの学会とwin-winの関係を構築できるように努めたいと思います。そして、何と言っても重要なのがJOAとの関係です。我々も「整形外科スポーツ医学会」である以上、JOAとの協力は欠かせませんし、JOAもスポーツ専門医制度の今後の問題等があり、「スポーツ」は重要な項目の一つです。是非、JOAとの相互関係も強化したいと思います。こちらも幸い、現在JOAのスポーツ委員会は担当理事が高岸先生で、委員長が帖佐先生です。JOSSMのことを愛してくださっている先生方ですので、いろいろと相談してみようと思っています。

2：国際学会との連携強化

これまで別府先生、菅谷先生を中心にAOSSMやKOSSMとの良好な相互関係を築いて頂きました。AOSSMにはtraveling fellowを派遣する道を作って頂きましたし、KOSSMとは隔年であったcombined meetingを毎年出来るように手配して頂きました。今後の目標はAOSSMとは相互関係を更に強化し、双方向の協力関係を築くこと、KOSSMとはシンポジストの相互派遣等、これまで以上に密な交流を目指すことです。更に、これまでtraveling fellowの交換が主な事業であったGOTSとも、学会同士の協力体制を強化したいと思

います。今年のGOTSに学会出席し講演をすることになっていきますので、その際にGOTSのメンバーと詳細を詰めたと思います。AOSSMのofficial journalであるOJSMやGOTSのofficial journalであるSOT journalからも様々なofferが来ています。JOSSMの論文の内、優秀なものについては、学会から援助を行って、これらの英文誌に投稿出来る仕組みを作りたいと思います。

3: スポーツ医学教育システムの構築

現在、専門医認定機構によって、新しい専門医制度が出来つつあります。どの診療科も現状は手探りの段階です。今後、スポーツ医学もこの専門医制度と様々な関わりが生じますが、その際にあわてない様に「スポーツ医」の教育制度が必要だと感じます。現状では個々の大学や診療施設では「スポーツ医学」全体を通して教育することは難しそうです。更に、「スポーツ医学」は大学

や診療施設だけではなくスポーツ現場での教育も必要です。これを可能にするのはやはり様々な領域を専門とする「スポーツ医」が集まるJOSSMだと思います。今後、専門医制度への対応を含めて、確かな知識と技術をもった「スポーツ専門医」の育成が出来る様に、学会としての体制を整えたいと考えます。この体制整備は教育研修委員会（加藤公担当理事）にお願い致しました。まず、それぞれの施設や現場でスポーツ医学教育をどの様にやっているか、何が出来るかを調査し、全国規模での「スポーツ医学教育」の体制を作りたいと思います。

以上、ちょっと大風呂敷を広げてしまいましたが、これからJOSSMの更なる発展を目指して活動して行きたいと考えておりますので、今後ともいっそうのご協力よろしくお願い致します。

■ 第 41 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を終えて

会長 久保 俊一

2015年9月11日、12日の2日間、ウェスティン都ホテル京都で第41回スポーツ医学会学術集会を開催致しました。学会テーマを「エビデンスに基づく整形外科スポーツ医学-選手、指導者、医療チームの一体化を目指して-」としました。このテーマに基づきプログラムを組むことで、医師以外の方にも多数ご参加頂きました。快晴にも恵まれ、最終的に参加者数は1,300名を超え、成功裡に終了することができました。

演題数は合計351題でした。指定演題が113題で、内訳は特別企画2題、招待講演2題、特別講演3題、教育研修講演5題、ランチョンセミナー10題、企画レクチャー1題、学術プロジェクト報告3題、Traveling Fellow報告5題、シンポジウム82題でした。応募演題は238題で、パネルディスカッション65題、ワークショップ65題、主題8題、一般演題37題、ポスター発表58題、特別セッション5題でした。

特別企画ではフィギュアスケーターの高橋大輔選手とプロサッカー指導者の佐々木則夫監督を招待しました。高橋選手には「アスリートとアーティストの融合を目指して」のタイトルで、前十字靭帯損傷から再びフィギュアスケート界のトップに返り咲くまでの軌跡を振り返って頂き、参加者の皆様にとって有意義であったことと思います。佐々木監督には「チームワークとコミュニケーション - 目標達成へのプロセス-」と題して、チームのまとめ方、総合力の高め方についてユーモアを交えながら分かりやすくご講演頂きました。招待講演では、KOSSM会長のDeuk-Soo Hwang先生とGOTS会長のVictor Valderrabano先生をお招きし、それぞれ「Hip arthroscopy for extra-articular hip disease」、「Management of ankle osteoarthritis」のご講演を賜りました。特別講演では、弘前大学の藤 哲先生に手関節周囲のスポーツ損傷、国立スポーツ科学センターの川



写真 1：会長挨拶

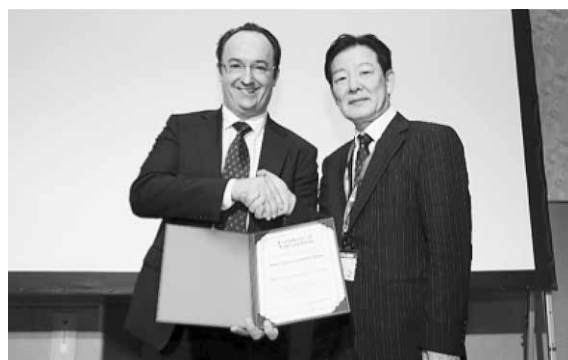


写真 3：招待講演 2 Victor Valderrabano GOTS 会長



写真 2：招待講演 1 Deuk-Soo Hwang KOSSM 会長



写真 4：特別企画 1 高橋大輔選手

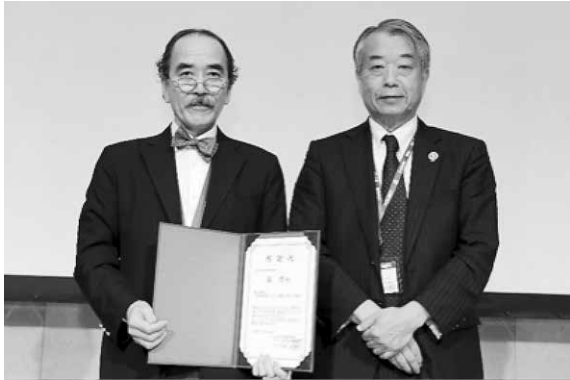


写真 5：特別講演 1 藤 哲先生

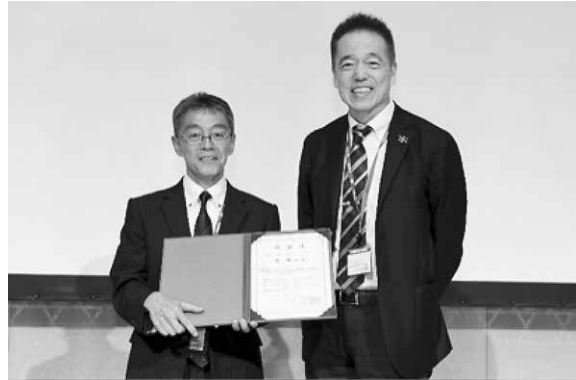


写真 7：特別講演 3 原 邦夫先生

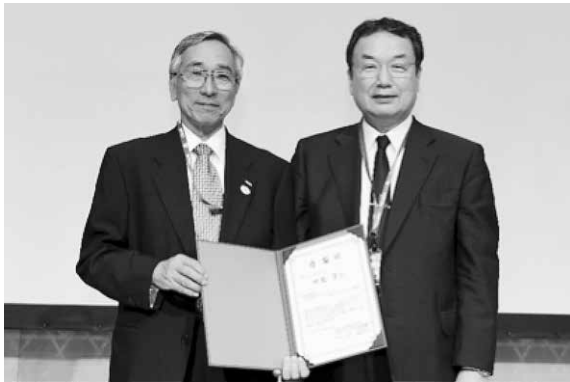


写真 6：特別講演 2 川原 貴先生



写真 8：特別企画 2 佐々木則夫監督

原 貴先生に東京オリンピック・パラリンピック、京都府立医大整形外科特任教授の原 邦夫先生に移植腱の血行動態と競技復帰についてそれぞれご講演頂きました。シンポジウムでは初日にサッカー、野球、陸上、柔道、バスケットボールおよびラグビーの6種目に特徴的なスポーツ外傷について、競技種目別にプログラムを組みました。これらのセッションでは本学会のテーマに沿って、監督やトレーナーの方も交えた討論となるように工夫しました。2日目は膝、肩、足・足関節、肘、股関節および手関節の6部位における代表的なスポーツ外傷についてシンポジウムを行いました。その他、「疲労骨折に対する診断、治療」、「中高年のスポーツ損傷」、「学童期のスポーツ損傷」を企画しました。

応募演題に関してもできるだけ総合討論ができるように半分以上をパネルディスカッションまたはワークショップの形式で採用し、それぞれのセッションで共通の問題点について討論できるようにプログラムを組みました。特別セッション「学生と若手医師が語るスポーツ整形外科」では5人の医学部学生による研究発表が行われました。各大学における指導が行き届いていたようで、どの演者

も立派に発表されていました。発表後の討論も盛り上がり、これからのスポーツ医療の担い手として十分に期待出来る発表でした。受賞に関しては札幌医科大学医学部5回生の藪下 佑君が優秀演題賞を獲得しました。

ハンズオンセミナーでは四肢エコー、肩関節鏡、膝関節鏡の3つを開催しました。例年、これらの手技獲得のセミナーでは一定のレベルに達している先生方を対象に、「技術を極める」ことを目的にしています。今回は特にこれからエコーや関節鏡を習得しようという方を対象として、基本的な理論や技術を中心にインストラクターの先生方に指導して頂きました。

プログラム全体を通して医師以外の方の発表も多数あり、共通のテーマについて幅広い意見が得られたことと思います。また各演者の提示しているデータが新しいエビデンスとなるわけですが、これらを現場に還元することの積み重ねが今後のスポーツ医学の発展につながることを祈っています。最後に、本学術集会にご参加いただいた方々、協賛・協力いただいた各社の方々と運営スタッフに深謝いたします。

■ 第 42 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会

会長 山下 敏彦



本年 9 月 16 日～18 日に札幌市において、第 42 回日本整形外科スポーツ医学会を開催させていただきます。1989 年に石井清一教授が第 15 回本学会を主催して以来、27 年ぶりに札幌医科大学整形

外科学教室が再び担当させていただくことを大変光栄に存じます。

本年は、8 月 5 日～21 日に夏季オリンピックが、9 月 7 日～18 日には同パラリンピックが、リオデジャネイロにおいて開催されます。本学術集会は、オリンピックの興奮冷めやらない中、そしてパラリンピックの盛り上がりの中での開催となります。と同時に、いよいよ 4 年後の 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて本格的にスタートを切る時期ともなります。

このような状況を踏まえ、学術集会のテーマを、「From Rio to Tokyo: the mission of JOSSM」とさせていただきました。東京オリンピック・パラリンピックそしてそれに先立つ平昌（ピョンチャン）での冬季オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツ医学的な問題点・課題を検討するとともに、JOSSM（日本整形外科スポーツ医学会）とその会員に期待されていること、求められていることは何かを考え、それに対して行動を起こしていく契機とした

いと考えます。

特別講演として、内閣官房参与で、2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会推進室長の平田竹男先生に、大会準備の中核におられる立場からのご講演を頂きます。また、オリンピック・パラリンピック関連のシンポジウムや、各種スポーツ障害をテーマとしたパネルディスカッションを企画しています。

海外からの講演ゲストとして、AOSSM（米国整形外科スポーツ医学会）プレジデントの Dr. Allen Anderson (Tennessee Orthopaedic Alliance)、2012 年の Orthopaedic Research Society 会長で外傷学に造詣の深い Dr. Theodore Miclau (Orthopaedic Trauma Institute, UCSF)、股関節鏡視下手術の権威 Dr. Dean Matsuda (DISC Sports & Spine Center) をお招きします。

尚、当初、本学会中に第 14 回日韓整形外科スポーツ医学会を併催する予定でしたが、諸般の事情により、同医学会は本年 8 月 26 日に東京都において別個に開催することになりましたのでご了承のほどお願い申し上げます。

「スポーツの秋」「学問の秋」「食欲の秋」、そのいずれについても 9 月の札幌には最適な気候と環境が用意されています。学会最終日の翌日は祭日となっています。ぜひ、ゆっくりと秋の札幌そして北海道を満喫していただければ幸いです。

多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

■ 副理事長ご挨拶

西良 浩一
(総務委員会 担当)

この度、日本整形外科スポーツ医学会の副理事長に任命されました徳島大学の西良浩一です。整形外科領域で唯一、スポーツ医学に特化した本学会において副理事長となり会の運営に携わらせていただくことは、スポーツドクターとしては最高の荣誉であるとの至福の喜びでございます。この度、副理事長として、若きスポーツドクターへのメッセージを送りたいと思います。それは、[VSOP] です。V: vitality, S: specialty, O: originality, P: personality の意味を持ちます。

医師になり、整形外科を志した20歳代は vitality の時代です。スポーツ医学に特化せず、variety 領域の整形外科を習得して下さい。そして、専門医取得後、30歳代には specialty の時代です。ぜひ、スポーツ医学を選択して下さいと思います。30歳代前半には、脊椎スポーツ、関節スポーツにこだわらず variety of

sports medicine に興味を持っていただきたい。そして、後半にはスポーツ専門領域にすすみ、40歳代の originality の時代を迎えます。

Originality を迎えた頃、教科書を「読む人間」から「書く人間」に変わる必要があります。教科書を読んで他人のテクニックをそのまま行うことは、30歳代で卒業し、40歳以後は、自分のオリジナルな手法を考え、教科書を執筆する、つまり歴史を変える人物に成長しましょう。そして実りある50歳代の personality の時代を迎えるわけです。

私は、現在52歳です。Personality の50歳代です。松本理事長、筒井副理事長と歩調を合わせ、personality で、JOSSMを国内外唯一のスポーツ医学会に更なる発展に繋げて行きたい、そう決意しております。

筒井 廣明
(財務委員会 担当)

この度、一般社団法人日本整形外科スポーツ医学会の副理事長（財務担当）を拝命いたしました。大変光栄に存じますとともに、責任の重大さを痛感いたしております。理事として本法人及びスポーツ整形外科の発展に寄与すること、また、副理事長として松本秀男理事長の負担を軽減し、麻生邦一先生、帖佐悦男先生と引き継がれてきた財務の健全化を引き継ぎ、本会が十分にその活動を行うための財源の確保を理事会のみならず会員の先生方のご協力のもと、行っていきたいと考えております。

担当させていただいている財務委員会の委員には2010年から担当されている大谷俊郎先生に引き続きお願いし、今まで財務委員会担当理事であった帖佐悦男先生には委員として入っていただくこととさせていただきます。

本法人の収入に関しましては、会員を増やすことが学会の活性化とともに最も大切な財源確保の方法ですが、ほかにも広告あるいは寄付による企業からの収入などが主な財源になります。会員の先生方の会費納入状況は約20%の先生が未納という状況ですので、納入方法についても検討中ではありますが、会員の皆様のご協力をお願いする次第です。

また支出に関しましては、学会発展のために必要な事柄に関しましては、可能な限りサポートできるようにしたいと考えておりますので、理事及び委員会委員の先生方には無駄な支出がなきようにご協力をお願いする次第です。

本学会とは30年を超える係わりを持たせていただいておりますが、代議員にさせていただいてからは、2007年に将来構想委員会の立ち上げに関与させていただき、その後、2008年から理事として、2011年に学会活性化検討委員会担当理事と総務委員会委員として、本学会の運営にかかわらせていただきました。その間、2012年には整形外科領域におけるスポーツ医学の進歩・発展のためには、学際的領域から成り立つ総合医学とし

ての体系とフィールドワークが主体の実践医学としての体系の両方を確立することが学会としては大切との考えを基盤として、第38回の本学術集会を開催させていただき、多くの整形外科医のみならず理学療法士やアスレチックトレーナーの方々の参加をいただきました。

この度の理事会では松本秀男理事長が、日本整形外科学会、特にスポーツ委員会との関係を強化し、本学会の立ち位置を決め、関連学会との関係を構築することで本学会のIdentityを確立し、国際関連学会(AOSSM、KOSSM、GOTS)との関係をより強化する国際化と、スポーツドクターの教育システムを作る教育面の充実を基本方針として提示されました。

大学を卒業後、「スポーツ」というキーワードで整形外科を希望される医師が増加し、医療現場ではスポーツ選手の治療を行っている整形外科医も増えてきていますが、スポーツの現場との連携やスポーツ医学の進歩に対応することが難しいとの意見も多く聞かれます。このような状況の中で本学会は、整形外科が部位別に専門性を持ってきていることもあり、「整形外科」と「スポーツ」という横断的なキーワードを学ぶ場としての学術集会や研修会の充実、あるいは既に各地で行われている研究会などとの連携を進めることも本学会の大切な役割の一つであろうと考えています。さらに、スポーツ医の認定を受け、知識を習得しても治療の場に活用できていない現状もあり、各種競技団体との連携や競技スポーツだけでなく、健康スポーツや学校教育現場で活躍するためにもメディカルスタッフや選手と十分にお互いの意見を討論できる場をつくることで「現場に強い整形外科スポーツ医」を育て、活躍できる環境を作ることも本学会に求められていると考えております。

副理事長の役職は身に余る大役ではありますが、理事及び西良浩一副理事長とともに、理事長を補佐し本法人の運営に積極的に携わっていく所存ですので、どうぞ会員の皆様のご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

■ 理事ご挨拶

柴田 陽三
(編集委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の二期目の理事を拝命致しました。引き続き編集委員会を担当し、本学会の発展のために尽力してまいりたいと存じますので皆様何とぞ宜しく御願い申し上げます。

さて、この1期目に理事として実行致しました業務についてご報告させていただきます。まず、情報発信のスピーディー化と学会員の利便性を向上させるために本学会誌の電子ジャーナル化を果たしました。PDFファイルとしてダウンロードできることはもちろんですが、研究発表の際に使える様にこれらの論文ファイルは部分的にコピーアンドペーストが出来るようにしております。会員各位におかれましては積極的にご利用頂けましたら幸いです。

続いて、GOTSのPresident Victor Valderrabanoより高岸前理事長宛に、Sports Orthopaedics and Traumatology journal (SOT journal) の査読業務への共同参画の要請がまいり、編集委員会で満場一致で賛成を致しました。松本新理事長のもとで査読委員が

選出される事になっております。査読業務を委託されるとともに、会員の皆様はSOT journalのオンラインアクセスが可能になる予定です。

日本整形外科学会スポーツ医学会誌はスポーツ医学に関する最新の知見を広める重要な役割を担っております。2020年の東京オリンピックはもう間近に迫っており、情報発信元の本誌の役割を考えると身の引き締まる思いを致しております。編集委員会では、掲載論文の質・量の向上に努めてまいりましたが、その中で、長年、編集委員長を任じておられました中川泰彰先生が任期を全うされ退任をなさいました。先生のご功績に対しこの場をお借りして感謝の念を表します。先生の強力なリーダーシップにより、編集業務を行ってまいりましたが、その理念を引き継ぎ、後任の阿部信寛先生ならびに委員の皆さんと学会誌の一層の質の向上に努めてまいりたいと存じます。今後とも御指導御鞭撻を賜りますよう、宜しく御願い申し上げます。

中村 博亮
(学術検討委員会 担当)

このたび伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に就任させていただくことになりました。名誉であると感じるとともにその重責を痛感しております。本学会の会員の皆様にこの紙面をお借りしまして、ご挨拶を申し上げます。

整形外科は頸部から以下の身体に生じた機能障害を再建する機能再建学であり、スポーツは機能障害を惹起する一大要因であります。スポーツ種目も多様で年齢層、またそのレベルやポジションもさまざまであるため、その対応には整形外科各専門分野の横断的な知識が必要になります。

一方、これまで学会レベルで認定されてきた専門医制度は大きく変わろうとしており、現在日本専門医機構が中心となって立案されてきた新専門医制度は、2017年

度春から後期研修を始める先生方に適用されます。新制度では国民目線から標準的治療を遂行できる医師の養成を目指しており、スポーツ整形外科を専門と志す若い先生方にも、まずは万遍なく整形外科各分野を学んでいただく必要があります。

本委員会では引き続き、研究助成や日本整形外科学会のシンポジウム及びパネルディスカッションのテーマや演者についての提案などを行っていく予定です。本邦における高齢者を含めたスポーツアクティビティの向上、健康寿命増進に寄与できるような活動も考慮し、微力ながら学会の進歩に尽力致す所存ですので、学会員の皆様にはご指導ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

金岡 恒治
(広報委員会 担当)

この度、日本整形外科スポーツ医学会の広報委員会の担当理事に就任させていただきました。若輩者で重責を果たせるか、はなはだ不安ですが、アドバイザーの先生方のご助力を頂きながら尽力させていただきます。

スポーツによる外傷や障害を診療するときには、その病態を選手・家族・指導者に正しく理解してもらえないと根本的な対処にならないことは日々の診療で感じるところです。もしすべての選手、指導者が十分なスポーツ医学の知識を持ち、それを実践することができていれば多くのスポーツ障害は悪化することなく寛解し、未然に予防されているはずでしょう。選手がどのような身体特性を持ち、どのような身体の使い方をすればスポーツ障害が予防され、ひいては競技パフォーマンスも高めることができるのか？ このことを突き詰めていくことが本学会の大きな課題ですが、研究から得られた最新の成果を広くスポー

ツ現場に普及していくことは障害予防のみならず、ひいては本邦の国際競技力を高め、2020年東京五輪の成功にも貢献するものと考えます。

広報委員会では外来診療で使いやすく、選手・指導者に理解されやすいパンフレット“スポーツ損傷シリーズ”を毎年2部のペースで作成し、すでに29部がアップロードされております (<http://www.jossm.or.jp/series/index.html>)。会員の皆様には忙しい外来診療での病態説明にご活用いただき、スポーツ医学の知識を現場に伝える手助けとしていただければ幸いです。スポーツ医学の進歩は著しく、どうしても最新の情報を載せられていないパンフレットも出てきますが、順次アップデートしていく予定です。お気付きの点やご意見がございましたら事務局までお寄せいただければ参考にいたしますので、よろしくご支援、ご協力をお願いいたします。

菅谷 啓之
(国際委員会 担当)

このたび日本整形外科スポーツ医学会の二期目の理事を拝命し、大変光栄に存じますとともに責任の重さを痛感致しております。本学会には1993年に入会して以来、スポーツ選手の肩関節・肘関節障害の治療を自分のライフワークと定め、学会発表や聴講を通じて深く本学会と関わらせて頂いてきました。一時期、膝関連学会を統一するという事でJOSKASと統合された時期もありましたが、やはり現在のようによりスポーツ医科学に重点をおいて独自に活動していくべき学会だと思います。各専門分野における健康スポーツからアスリートに対する対応、さらに専門分野を超えたスポーツ医科学こそが深く関わっていくべきテーマと考えております。特に2020年の東京五輪に向けて、アスリートを如何に外傷や障害から高いレベルで復帰させるかは、我々がスポーツ整形外科の専門医として研鑽を積んでいかねばならない大きな課題であると考えています。

一期目の理事では国際委員会を担当させて頂き、別府諸兄アドバイザー、熊井司委員長に多大なるサポート

を受けながら何とか2年間無事に勤めることができました。本年からは、熊井司先生が新理事になられた関係上、私が担当理事と委員長を兼任することになりましたが、引き続き別府先生にはアドバイザーを、また熊井新理事には委員としてメンバーに入って頂き、新体制もサポートして頂くことになっております。今季からは新メンバーも加わり、JOSSM-USAトラベリングフェローの派遣を中心とするAOSSMとの関係強化、GOTSトラベリングフェローの派遣および受け入れ、JOSSM/KOSSM共催学会の開催を中心に、新旧メンバーと共に頑張っております。本学会の歴史と伝統を踏まえて、上記の3大プロジェクトを通じて本学会員の国際化、とくにglobalな視野を持った若手学会員の育成に特に重点を置いて頑張っていく所存です。浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承しつつ益々発展できますよう誠心誠意努力する所存ですので、どうかご指導ご鞭撻の程、よろしくお申し上げます。

加藤 公
(教育研修委員会 担当)

この度、松本理事長による新体制のもと、教育研修委員会担当理事をさせて頂くことになりました鈴鹿回生病院の加藤 公と申します。

スポーツ医学が医学会のみならず、社会的にも注目されてきている昨今、日本整形外科学会スポーツ医学会はより一層重要な役割を担うことになっていくものと考えております。

私は以前、広報委員会担当理事、会則等検討委員会担当理事をさせて頂き、本学会の現状や今後の展望について、理事の先生方をはじめ皆様のご意見を賜りながら、調査検討を行う機会を頂いたことがございました。もちろん、教育研修委員会担当の経験はございませんが、これまで前任の先生方が教育研修として、大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナーの開催など様々な形で、スポーツ医学に貢献してこられた功績はよく存じて

おり、引き続き、皆様と協議しながら委員会の運営に努めたいと思っております。今後の展望については、一様ではありませんが、スポーツの振興に伴って、スポーツ医学の必要性が増していることから、医師をはじめトレーナー、理学療法士、スポーツ医科学者やそれらを目指す学生への教育をいかに進めていくかは重要な問題だと認識しております。できますれば、まずは本学会を担うであろう若い医学生や研修医に対するスポーツ教育システム作りを進めたいものと考えております。

そうは申しましても、なにぶん私は微力でございます。松本理事長はじめ各理事の先生方のご指導を賜りながら教育研修委員会担当理事として、本学会の運営に関わることで、本学会の発展のために努力したい所存でございます。何卒よろしく願い申し上げます。

稲垣 克記
(社会保険委員会 担当)

松本秀男理事長による新たな体制のもと、日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に就任させていただくことになりました。日本整形外科学会のスポーツ担当委員も務めさせて頂いております。

近年、トップアスリートや若い世代の一般スポーツ選手だけでなく中・高齢者のスポーツの必要性が求められています。このような社会情勢の中で正しくスポーツ活動を広めスポーツ医学の実践と障害・外傷の予防を研鑽してゆく必要があります。本学会は日本整形外科学会とスポーツに関する最も重要な橋渡しとなる学会と位置づけられています。今後、日本整形外科学会会員やスポーツ専門医が本学会を通してスポーツ選手を実際に現場でいかに活躍してゆくか、そして予防をいかにするか行

政を含め考えていく必要があります。

私は学生時代に国体代表選手であり、また日本代表ナショナルチームの帯同医師として国際試合の舞台で多くのことを学ばせていただきました。近い将来、本学会を通してこれらの現場で活躍出来るスポーツ専門医を育てて行きたいと考えます。また、微力ではありますが社会保険委員会の担当理事として、診療報酬に関する事案に取り組みたいと思います。スポーツ関係の手術や診療報酬が保険上、合理的なものとなるようにし社会の構築にますます寄与できるよう、微力ながら尽くしていく所存です。会員の皆様には、ご指導およびご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

松田 秀一
(メンバーシップ委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に就任させて頂くことになりました。誠に身に余る光栄であり、その責務の重大さを痛感しております。2014年から理事を一期務めさせて頂きましたので、今期が二期目となります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

スポーツ医学における整形外科医の役割が非常に大きいことは論をまちませんが、他科の医師、理学療法士、トレーナーとの共同作業なくては適切な予防、医療を行うことはできません。日本整形外科学会スポーツ医学会は整形外科が中心となり、スポーツ医学を発展させていく上で非常に重要な意味をもつ学会であると思います。東京オリンピックもいよいよ4年後に迫ってきています。治療だけではなく、予防やコンディショニングなどを含めたスポーツ医学は整形外科だけではカバーできないところもあると思いますが、やはり運動器の専門として整形外科がイニシ

アティブをとってこの分野を牽引していかなければならないと思っています。

今期も引き続きメンバーシップ委員会を担当させていただくこととなりました。本学会がスポーツ医学、医療の発展に寄与するためには学会員の増加およびそれに伴う学術活動の活性化は必須と考えておりますので、是非学会員を増やすことができるように努力していきたいと思っています。それと同時にスポーツ医学というものは様々な分野の人が感心をもっている領域でもありますので、入会審査につきましては十分に慎重に行いたいと思っています。

微力ではございますが、松本秀男理事長はじめ副理事長、理事の先生方のご指導を賜りながら、本学会の運営にかかわって参りたい所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

熊井 司
(ガイドライン策定委員会 担当)

このたび、日本整形外科学会スポーツ医学会の理事という大任を拝命し、大変光栄に存じております。伝統ある学会の中での責任の重大さを痛感しております。

昨年までは、本学会の国際委員会委員長として菅谷啓之担当理事のもとGOTS/JOSSM/KOSSM Traveling Fellowship や JOSSM-USA Traveling Fellowship の fellow 選出や訪問先との連携、日韓整形外科スポーツ合同会議の開催に関する任務などに従事して参りました。これからも引き続き国際委員会の委員として、各国の学会間での国際交流を通じて本学会員の国際化や若手会員の育成にお役に立てることを大変嬉しく思っております。私自身も2005年にGOTS/JOSSM/KOSSM Traveling Fellow として選出していただき、ドイツ語圏のドイツ、オーストリア、スイス各国を約1か月間研修させて頂きました。スポーツ整形外科に関する技術や学術交流のみでなく、訪問先の歴史や文化、思想に大いに触れることができたことは私にとっての一生の思い出となっており、今なお出会った先生方との交流を続けています。また逆に、我々の日本の歴史や文化を

改めて考えることのできる良い機会だったとも感じております。スポーツ整形外科を介して、異文化を考え多くの人と触れ合うことのできるこのTraveling Fellowshipの存在は本学会の一つの大きな財産であり、これまでの歴史や経緯を踏まえたくて今後もそれを継承しさらに発展させていけるよう一翼を担いたいと思っています。

また、本年度からは同時にガイドライン策定委員会を担当させて頂いております。帖佐悦男委員長のもと、日本整形外科学会と連携してアキレス腱断裂診療ガイドラインの改定作業が進行中であります。アキレス腱断裂に関しては、新たなエビデンスが日々更新されているのが現状であり、整形外科診療における重要性は大きいものと感じています。この改定ガイドラインが正確な最新のエビデンスによる診療指針として活用されるべく、委員の先生方とともに取り組んでいきたいと考えています。

浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承し更なる発展に貢献できるよう誠心誠意努力する所存です。どうかご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

土屋 弘行
(定款等検討委員会 担当)

皆様、本年もよろしくお願い致します。

この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の二期目となる理事を担当させていただくことになり大変光栄に存じます。一期目に引き続きまして、委員会では定款等検討委員会を担当しておりますのでよろしくお願い致します。

前回は申し述べさせて頂きましたが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて大いにスポーツ医学への関心が集まり、注目度も高まって来ています。これまで整形外科医は主に手術療法を含む運動器の治療においてスポーツ医学の中心的役割を担ってきました。これからは、これまで以上に理学療法士やトレーナーなどと協力して、スポーツ外傷や障害の予防、スポーツ復帰へ向けたリハビリテーションなど幅広い活動を科学的に検証して、その普及と振興に尽力していく必要があると考えます。そして、本学会の役割は、運動器スポーツ医学に関する既存および新しい検査法や診断法、治療法、治療成績の解析法とその分析結果などを検討する場を提供することであり、優れた研究成果を国内外へ向けて発信することだと思います。このためには充実した

学術集会の開催と本学会の継続的な発展が不可欠と考えます。そのためには、会員数のさらなる増加、若手スポーツ整形外科医の育成、スポーツ指導者を含めた準会員数の増加が必須と考えます。

私の専門領域は、骨軟部腫瘍、小児整形、骨折合併症ですが、小児から青年期にかけてのスポーツに関連した疲労骨折に非常に興味を持って研究しています。そして現在、北陸地方でのスポーツ整形外科の普及、振興、啓蒙に努めています。特にスポーツ損傷予防プログラムの普及に力を注いでおり、ACLプロジェクト、PETを用いた筋疲労の客観的評価とウォーミングアップメニューの確立およびそのアプリの開発などの活動を行っています。これと同時に、北陸地区からのより一層の会員数増加を目指しています。

本学会が、魅力あふれかつ日本のスポーツに係わる全ての人にとって有益な情報を提供できる学会になるよう、そして更なる発展をするように引き続き尽くしていく所存です。何卒、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

石橋 恭之
(将来構想委員会 担当)

この度、日本整形外科スポーツ医学会の理事に再任させて頂き、また将来構想委員会を担当することになりました。本学会の会員の皆様はこの場をお借りして感謝を申し上げますと共に、新任のご挨拶を申し上げたいと思います。

さて、将来構想委員会は元の学会活性化検討委員会です。学会活性化にあたっては、先の就任の際にも述べましたが、学会の本来の主旨である学術活動の活性化が最も重要です。他の診療科同様、整形外科の分野でも細分化が進み、様々な分野の整形外科専門医が一堂に会する機会は少なくなりました。本学会は、各専門分野の整形外科医がスポーツ外傷と障害を多面的・横断的に議論できる場であり、数ある学会の中でもその存在意義はあり、今後も必要な学会だと思います。

しかし、学会の将来構想を考えた場合、やらなければ

ならない事は多々あります。他の国内学会との関連構築、さらに AOSSM（アメリカ整形外科スポーツ医学会）や KOSSM（韓国整形外科スポーツ医学会）など国際関連学会との関係強化、またスポーツ専門医をどうするかといった問題などが挙げられます。これらの課題については、他の理事や代議員、また学会員の皆様方と共に考え、解決していきたいと思っています。

ところでずいぶん先だと思っていた2020年の東京オリンピックももう間近です。スポーツ選手を診療している我々整形外科医の役割は、今後益々大きくなっていくものと思われます。本学会が、若手整形外科医にとって参加したい魅力のある学会になるように、またスポーツ医学の発展に寄与し、より良い医療を提供できるように、微力ながら努力していきたいと思っています。ご指導のほどよろしくお願い致します。

田中 寿一
(専門医制度検討委員会 担当)

この度、専門医制度検討委員会理事を拝名いたしました。私にとって前回から再任ということになります。専門医制度が確立されない状況で、特に具体的な方策は提示できない活動でありました。今回は、基盤学会である整形外科学会の専門医制度が固まりつつある動向を見つめ、整形外科スポーツ専門医の立ち位置を確立すべく活動したいと思っております。

しかし、その前に、我々が克服せねばならない大きな課題があります。それは、前回指摘したように、整形外科スポーツ医の現状は、整形外科学会が研修を行い、スポーツ認定医を認定し、その後教育研修の単位取得以外、follow が無い状態の中で、JOSSM から JOSKAS が分離し、2つの任意整形外科スポーツ学会が存在するという歪な現状が依然あります。同じ構成員が複数の学会に所属し、同じ様な発表を繰り返し、学会認定料の他に、各学会への年会費を複数に支払うとい

う無駄があります。このことは、これからスポーツ医を志す若い整形外科医にとって、決して好ましい状態ではありません。この歪な現状は、学会のための専門医であると言わざるを得ません。

一方、このためか、我が国のスポーツ界は、相変わらず民間代替医療に頼っているという状態であり、残念ながら整形外科スポーツ医が、アスリートから信頼を得ているとは到底言えない現実があります。

まず、整形外科スポーツ医を志す若い医師に、真のスポーツ整形外科専門医制度を構築することが必要と思います。今後、前理事長高岸先生をアドバイザーに、日整会と協力し整形外科スポーツ専門医認定・学術活動の一本化を図り、整形外科医が一丸となって、“国民スポーツ”のケアに、国民の信頼をえて、中心的役割を担い医学サポートできる体制を構築できるように、努力したいと思っております。

奥脇 透
(倫理・利益相反委員会 担当)

このたび、日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に再任させていただきました奥脇です。本学会の抱えているさまざまな問題について、松本理事長、並びに西良・筒井両副理事長、そして理事の先生方と力を合わせて取り組んでまいりたいと思います。また再任にあたり、「倫理・利益相反委員会」を前任の丸毛担当理事から引き継いで担当させていただくことにもなりました。微力ながら務めさせていただきます。なお、この度の組織改変に伴う各委員会の見直しにあたって、前職として担当させていただいた「障害検討委員会」が終了となりました。さまざまな課題を残したままとなり残念な思いですが、ジュニア世代のスポーツ障害への対応に関しましては、委員の先生方にはそれぞれのスポーツ現場での活動を継続していただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

さて、「利益相反 (Conflict of Interest : COI)」に

関しては、ご存知のように、すでにさまざまな学会にて開示が求められてきています。本学会でも、先日、久保会長のもと、京都で開催された第41回日本整形外科学会スポーツ医学会学術集会にて、発表時にCOIの開示がなされてきました。「倫理・利益相反委員会」は、これまでの「倫理委員会」に「利益相反」関連事項を加えた形で設置されました。そして丸毛前担当理事のもと、利益相反に関する指針、細則およびQ & Aが策定され、これらに関する申請書、申告書等の様式の整備が行われてきました。2016年1月からはCOIの申告が本格的に始まります。研究者にとっては、COIを正確に申告することで透明性、公明性を示すことが求められています。多少煩雑さが伴いますが、本学会のさらなる発展のため、是非とも委員の先生方のご協力およびご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

■ 監事ご挨拶

この度、日本整形外科学スポーツ医学会の監事に選任されました。監事は法人の財産や理事の業務執行の状況を監査する立場であります。松本秀男理事長をはじめ、理事各位と意思の疎通を図りながら業務運営の実施状況を把握し、運営上の課題認識を深め、常に公平

前期に引き続き、本学会の監事を務めさせていただくことになりました。名誉会員、理事、代議員、会員の先生方には、何卒宜しくご高配を賜わりますようお願い申し上げます。

元々、私は、中学・高校・大学時代に水泳部に所属して、長年スポーツ活動に親しんだという縁で、医学生時代からスポーツ医学を志し、名古屋大学整形外科教室（中川 正教授:当時）の門を叩き、整形外科スポーツ医学の道に入りました。

大学院学生1年の折、杉浦保夫助教授（当時）と共に、本学会の前身である第2回整形外科スポーツ医学研究会（1976年、東京：岸記念体育会館）に初めて参加して以来、約40年、東京厚生年金病院、東京大学、日本体育大学と所属は変わりましたが、一貫して本学会に深く関わらせていただきました。この間、本学会を通して、大学や医局の枠を超えて、数多くの先輩・同輩・後輩から様々なことを学んできました。また、疲労骨折、水泳障害等の学会発表、論文執筆、共同調査研究等を介して、全国の新たな仲間づくりができたのも、本学会のおかげです。

丸毛 啓史

不偏の立場で職務を遂行してまいります。

微力ではありますが、本学会の発展のために尽力いたしたいと存じますので、皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

武藤 芳照

平成20（2008）年7月4日（金）、5日（土）の2日間、「スポーツ外傷・障害のメカニズムと予防」をメインテーマとして、第34回学術集会の会長を務めさせていただくと共に、その内容を『スポーツ医学実践ナビ-スポーツ外傷・障害の予防とその対応-』（日本医事新報社、2009年）の単行本として発刊できました。

振り返ってみれば、私が昭和50（1975）年3月、大学医学部を卒業して以来の一人の医師としての歩みと、本学会の歴史の歩みが同じであるのは、縁と運の賜物と感じています。

そうした本学会への強い愛着と深い感謝の念を抱いている私としては、二期目となる監事の役目は大変光栄であると共に、本学会への恩返し之机会と思っています。

松本秀男理事長をはじめ、理事の先生方の日常の業務執行を見守りつつ、規則と手続き面の立場から、公平・公正な運営がなされるように、誠実に尽力することが使命と認識しております。また、一人ひとりの会員が、「本学会に入会して良かった」と率直に思っていただけのような学術組織の基盤づくりに、いささかなりとも貢献できれば幸いです。

■ GOTS-KOSSM-JOSSM travelling fellowship 2015 報告記

千葉大学大学院医学研究院整形外科学 山口 智志 (本文担当)
慶應義塾大学医学部整形外科学 二木 康夫

【はじめに】

2015年5月15日から6月14日まで、二木康夫先生(慶応大学)、Dong-Hwi Kim 先生 (Chosum University Hospital)、Chang Kang 先生 (Chungnam National University Hospital) とともに、GOTS-KOSSM-JOSSM travelling fellow としてドイツ、オーストリア、スイスを訪問する機会をいただきました。4週間で3か国、10つの街を訪れ、以下の9つの病院を訪問させていただきました。

- ・ Klinikum Osnabruck, Osnabruck, Germany
- ・ Universitätsmedizin Rostock, Rostock, Germany
- ・ Martin-Luther-Hospital, Berlin, Germany
- ・ Unfallkrankenhaus Salzburg, Salzburg, Austria
- ・ LKH Stolzalpe, Murau, Austria
- ・ Allgemeines Krankenhaus der Stadt Wien, Vienna, Austria
- ・ Rennbahn Klinik, Basel, Switzerland
- ・ Privatklinik Obach, Soletta, Switzerland
- ・ Universitatsspital Basel, Basel, Switzerland

【プログラム全体の印象】

全ての訪問地で、ホストのドクターは多くの準備をして我々を迎えてくださいました。これは、先輩の先生方が長年にわたり築いてくださった GOTS-KOSSM-JOSSM travelling fellowship の歴史があつてのことだと感じました。

Allgemeines Krankenhaus der Stadt Wien や Universitatsspital Basel のような大学病院から、Rennbahn Klinik のようなスポーツ整形外科に特化した private clinic まで、様々なタイプの病院を訪れることができ、非常によいプログラムだと感じました。各分野のエキスパートの先生方の手術を見学することにより、世界の整形外科の中での自分のレベルを明確に認識することができました。また手術だけでなく、外来や基礎研究の施設の見学も大変興味深かったです。

【手術】

多くの病院、特に private hospital では、手術室や

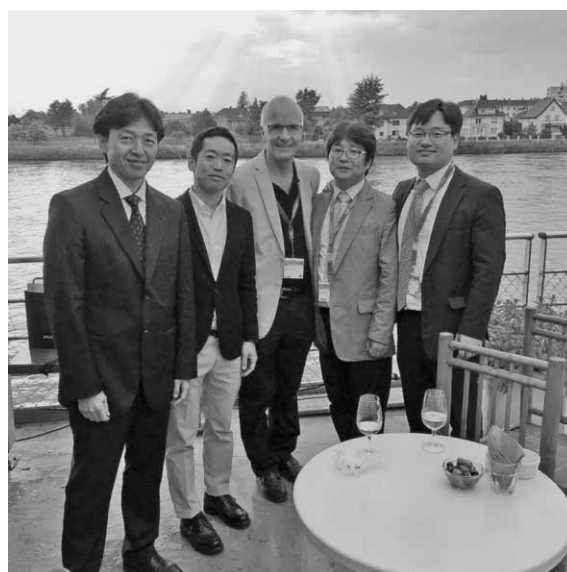
外来は高度に効率化、分業化されており、医師にとっては働きやすい環境にみえました。一方、手術手技や診断技術については、日本は決してひけをとらず、自信を持ってよいと感じました。私の専門である足部、足関節について言うと、ヨーロッパから多くの報告がある人工足関節について、多くの先生がやや否定的な意見を持っていたことが意外な発見でした。長期経過では failure が非常に多いという報告がでているためのようです。その他、スポーツ選手の下肢慢性コンパートメント症候群に対する鏡視下筋膜切開や stemless の人工肩関節など、日本ではなじみのない手術を見学することができました。

【食事】

過去の fellow の先生方にお聞きしていた通り、毎晩のように続くディナーは体力的につらい面もありましたが、旬のホワイトアスパラガスや肉料理を堪能しました。

【観光】

ホストの先生方には、様々な観光を用意していただきました。世界遺産の街であるザルツブルグやウィーン、ア



写真：GOTS congress の reception にて。左より二木先生、山口、学会長の Hintermann 先生、Kang 先生、Kim 先生。

ルプス山脈の Jungfrau を訪れたのは、一生の思い出になりました。またスポーツ整形外科の travelling fellowship らしく、スポーツをする機会も多かったです。今回のプログラム全体のコーディネートをしていただいた Dr. Martin Engelhardt は、膝 OA を患っているにも関わらず、たびたび我々とともにジョギングをしてくださいました。Privatklinik Obach では、マウンテンバイクでのダウンヒルを体験しました。そして GOTS congress の最終日の朝は、Dr. Engelhardt や学会長の Dr. Beat Hintermann とともに morning run で今回の旅を締めくくりました。

【最後に】

今回の fellowship は、手術を見学するだけでなく、異なる国の生活習慣や医療システムを知ることができました。これは、海外の学会に参加するだけでは得られない、貴重な経験でした。最後に、訪問先でお世話になった先生方、旅をともにした二木先生や韓国の fellow はもちろんのこと、fellowship の機会を与えていただいた理事長の高岸憲二先生、国際委員長の菅谷啓之先生に感謝いたします。また、参加を許していただいた千葉大学整形外科の高橋和久教授、不在中の診療を助けていただいた佐粧孝久先生以下、スポーツグループの先生方にも改めて感謝いたします。

2015 JOSSM-USA Traveling Fellow 報告記

聖路加国際病院整形外科 田崎 篤

2015年7月1日～16日まで、徳島大学病院の松浦哲也先生、宮崎大学の田島卓也先生と JOSSM USA-Traveling Fellow として Univ. of Massachusetts (Dr. Busconi)、Columbia Univ. (Dr. Levine)、Andrews Institute (Dr. Andrews) の施設訪問及び AOSSM に参加させて頂きました。それぞれの施設で直接現地の先生方と我々の臨床研究の報告や意見交換をさせて頂き、多くの交流を持つ機会を持つことができました。論文を書くこと、学会で報告すること、そして直接会って話をして意見をぶつけ合うことの重要性を強く感じた次第です。松浦先生、田島先生の“意見を戦わせ

る”ご姿勢に負けぬよう、日本の代表として主張すべきことを伝え、そして出来るだけ深く楽しく交流を重ねました。滞在中、予定外で急に紹介状2通準備するよう指示され時に、JOSSM の先生方と事務局の方が迅速なご対応でご準備下さったことが何より感激でした。2014年度理事長でおられた高岸先生、副理事長の別府先生、帖佐先生、ならびに菅谷先生、熊井先生、国際委員会の先生方、事務局の斉藤さんには格別のご高配を賜り、感謝申し上げます。そして、貴重な機会を下さった本会会員の方々に深く御礼申し上げます。



写真1：U-Mass の手術室にて、向かって右から松浦先生、田島先生、Dr. Busconi、田崎 篤



写真2：Red Sox 3A チーム試合中のベンチにて

■ 2015 JOSSM-USA Traveling Fellow 報告記

宮崎大学医学部整形外科 田島 卓也

2015年7月1-16日の期間にJOSSM-USA traveling fellowとして徳島大学の松浦哲也先生および聖路加国際病院の田崎篤先生と参加させていただきました。AOSSMの他にボストンのUMass Memorial Hospital、NYのColumbia University、フロリダのAndrews Instituteの3施設を訪問させていただきました。JOSSMフェローということでどの施設でも歓待を受けました。世界を牽引する施設でのラボ見学や熟練された手術手技の見学はもちろんのこと、Profやほぼ同世代のAssociate Profたちそして若手のfellowやresident

の先生方と仕事のことはじめ色々なことを語り合えたことはかけがえのない経験になりました。手術適応、手術手技、医療システムなど日米の共通点や相違点などありますが、新たなアイデアもいただいた気がします。

貴重な経験をさせていただきました高岸憲二理事長、別府諸兄副理事長、菅谷啓之国際委員会担当理事、熊井司国際委員会委員長（当時）、国際委員会の先生方、JOSSM事務局の方々、宮崎大学整形外科の帖佐悦男教授と医局員の皆さまに深謝いたします。

■ 2015 JOSSM-USA Traveling Fellow 報告記

徳島大学運動機能外科学 松浦 哲也

2015年7月1日～16日まで、聖路加国際病院の田崎篤先生、宮崎大学の田島卓也先生とともにJOSSM-USA Traveling Fellowとして研修させていただきました。貴重な経験をさせていただいた本会会員の方々に厚く御礼申し上げます。特に当時理事長の高岸先生、副理事長の別府先生、帖佐先生、ならびに菅谷先生、熊井先生はじめ国際委員会の先生方、事務局の斉藤さんには格別のご高配を賜り、感謝申し上げます。

訪れたのはアメリカ東海岸を北から南にUMass Memorial Hospital（ボストン）、Columbia University

（ニューヨーク）とAndrews Institute（ペンサコーラ）の3施設、そしてオーランドで開催されたAOSSMでした。いずれの施設もホストのBusconi先生、Levine先生、Andrews先生はじめスタッフの方々には温かく迎えられました。実際の診療から研究に至るまで余すことなく見学させていただき、また我々の研究成果を披露し意見交換できたことは貴重な経験となりました。今後はこの経験を本学会の発展に活かせるよう、微力ながら尽くしていきたいと思っております。

お知らせ

1. American Journal of Sports Medicine (AJSM) の購読について

本学会の会員は、American Journal of Sports Medicine (AJSM: 年 12 冊発行) を特別優待価格で購読することができます。

	一般価格	特別優待価格
AJSM 購読	\$183.-	\$102.-
オンライン購読	一般向けサービスなし	\$ 30.-

AJSM 購読、オンライン購読のどちらにお申し込みいただいても、1972 年の創刊号以降の全刊行物にアクセスが可能です。

特別優待価格での購読を希望される会員のかたは、事務局あてメールにて購読希望である旨をご連絡ください。(info@jossm.or.jp) 追ってお申し込みについてのご案内をお送りしますので、各自購入手続きを進めてください。

2. 会員登録情報の変更、メールアドレスの登録について

勤務先、自宅、メールアドレスに変更がありましたら、お早めに事務局あてメールにてご連絡ください。(info@jossm.or.jp)

ご連絡がない場合、学会雑誌をはじめ事務局からのご案内がお手元に届かないことがありますのでご了承ください。また、日々のご連絡の他、学会情報や演題登録のご案内など、今後は一斉メールを活用して事務局からのご案内をお送りいたしますので、メールアドレスをご登録いただいていない方は、事務局あてご連絡ください。

編集後記

第 41 回本学会は久保俊一学会長のもと、平成 27 年 9 月 11 日、12 日にウエスティン都ホテル京都にて開催されました。今回の学会のテーマは「エビデンスに基づく整形外科スポーツ医学—選手、指導者、医療チームの一体化を目指して—」でしたが、今後はエビデンスに基づく治療が重要になることは間違いありません。少しでもスポーツ損傷や障害に対するエビデンスを示すことができるように我々スポーツ医も日々精進していかなばなりません。今回の学会ではサッカー日本女子代表の佐々木則夫監督の講演も拝聴しましたが、選手と指導者、医療チームが一本化し、常に情報を共有することの重要性を強調されました。現在、オリンピック予選は大苦戦中ですが、何とか頑張っていきたいものです。

今年は NBA のスーパースターのコービーブライアント選手が現役引退を発表しました。NBA 選手のアキレス腱断裂後の試合復帰率が悪いことが論文には掲載されていますが、コービーブライアント選手はアキレス腱断裂を乗り越えて復帰し、そしていよいよ今年がラストシーズンとなります。バスケットボール界の生きる伝説を最後まで応援し続けたいと思います。いよいよ東京五輪まであと 4 年、今後、ますますスポーツ医学が発展し、一人でも多くの選手が活躍できることを期待しています。

(安田稔人)

日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター No.15 2016 年 3 月 31 日発行

編集：日本整形外科スポーツ医学会広報委員会

金岡 恒治 (担当理事)、亀山 泰 (アドバイザー)、酒井 宏哉 (アドバイザー)
今田 光一、高橋 敏明、平野 篤、村 成幸、安田 稔人

発行：一般社団法人日本整形外科スポーツ医学会

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル 株式会社コングレ内

TEL 03-3263-5896 / FAX 03-5216-3115

E-mail info@jossm.or.jp URL http://jossm.or.jp/